

移動式茶室の製作を通して ～ 地域に根差したものづくり ～

山形県立鶴岡工業高等学校
建築システム科 佐藤 有二

1 はじめに

鶴岡市は古くから木材加工産業が盛んであり、その技術者育成のために本科が貢献してきた経緯がある。しかし、近年この産業は極めて厳しい状況にあり、事業所の数が減少するとともに従業者数が減少の一途を辿っている。本研究はものづくりを通して職人の技術を習得し広く紹介する活動を行い、後継者を育成するきっかけになることを目的とする。

教育制度に目を向けると、平成25年から全面実施される新教育課程は、専門教科に大幅な変更がなかった反面、道徳教育では「伝統と文化を尊重」

「我が国と郷土を愛し」という表現が用いられた。また、山形県の5教振には、「郷土に誇りと愛着を持ち」と表されている。地域を思い、そこにある問題を解決しようと試みるときに、たくさんの地域の人と関わりを持つ必要が生じる。このことは人間育成を図る上で大変重要な要素となると考える。

移動式茶室の製作を通して生徒が地域と関わりながら成長を遂げることを期待するものである。

2 研究の経過

1) 現状調査と模型制作

研究に着手して、最初に地元茶道教室の中村宗寛先生の茶室を見学させていただいた。そこでは、広さやお点前の位置、動線、材料など茶道の普遍的な事項について学ぶことができた。それを基に模型を製作し、再度ご指導をいただいた。

2) 茶室の設計

中村先生の指導により、茶室を表1の通り決定し構造は組立式のため釘を使用しない構造とした。

表1 移動式茶室の概要

広さ→	4畳半（他に床の間半畳）
大きさ→	幅2970×奥行3420×高さ2400[mm]
材料→	地元杉材、米桧、合板
部材点数→	およそ80点
仕上→	土塗りおよび和紙風壁紙
塗料→	サンディングシーラー（下塗り） ラッカーフラット（上塗り）各1回

本来であれば壁は土塗りおよび和紙張仕上であり、

それに応じた下地とすべきであるが、移動式という性格のため耐久性に富む必要があった。このため、塗壁・和紙張風の壁紙仕上げとした。

3) 製作過程

製作にあたり材料を積算し発注した。材料は地元の杉材を主としている。

製作に取り組む心構えとして、

①限りなく本物に近いものを目指す。

②自分たちの手で全てを製作する。

③生徒自身で製作に加え渉外も担当する。

以上を合言葉に、業者との連絡も台本を作ってから電話するなど基本的には生徒が行っている。

a 軸組みの製作

木部の製作は、日頃の授業の成果を活用して行った。日頃使用しない木工機械を使用することもあったが、操作の要点をすぐに理解して器用に使いこなせるまでに至った。

角材を製材してから製作までの日数が大変短かったため、加工後に含水率の変動する状況であった。このため、教科書通りの乾燥収縮が発生し、図らずも生徒は実現象を体験することになった。



写真1 軸組加工作業（左）と建具現場見学（右）

b 建具の製作

建具を製作するにあたり、地元の泉興業㈱へ見学に行った。百瀬常務に指導をいただく中で、普段何気なく見ている障子戸が、実は多くの決まりごとに基づいて造られていることを知り、生徒共々感激して帰校した。

c 壁紙の施工

壁紙は㈱野口内装の野口会長に来校していただきて指導を受けた。通常は糊付機を使用する作業を手

作業で行った。会長さんの「まずはやらせてみる」指導が生徒の興味をひき数時間で完成に至った。

やはり「移動式」という性格上、組立と解体を繰り返した時にダメージを受ける部材であり、出前が終わるごとに手入れが必要なことも分かった。



写真2 壁紙の張付作業（左）と畳縫い体験（右）

d 畳の製作

まず最初に4畳半と床の間の畳表と縁がそれぞれ異なることを伺い感動させられた。(株)畳の小池専務と私も「簡略的に同じものを使用してはどうか」と生徒に問いかけたが、「本筋で行きます」との回答が返ってきた。最後まで強いこだわりを持っていたのは生徒であった。

残念ながら、畳を制作するためには熟練の技術が必要であり、にわか仕込みでは畳表が平滑に仕上がらないことが分かった。このため今回の製作で畳だけは唯一自分たちで作ることができなかった。

e 組立

当初の目標は、「組立時間30分以内」であった。初めての組立には一日を要したが、二回目は1時間30分であった。三度目のイベントでは、ついに35分で完成させた。



写真3 完成した茶室

f お点前のお稽古

茶室の製作作業と平行して、班員2名が裏千家の中村宗寛先生の下で、お点前の稽古に通った。その後、他の班員にお点前と茶・菓子の作法を伝え、全員が一通りの所作を習得することができた。

この後のイベントでは、毎回のように会場を訪れ

ては温かい言葉をかけていただいた。先生の来場に生徒は極度の緊張状態であったが、温かい言葉を頂き喜びも格別であった。

g 抹茶茶碗の製作

本研究で茶室の製作を行うことに伴い、茶室に飾る掛け軸や茶花など付随する知識を習得する必要があった。また、地元の陶芸家、中村秀和氏に依頼して抹茶茶碗を制作した。手ろくろを使用した作業であったが、思うような形状を造ることがこれほど難しいものかと実感した。



写真4 抹茶碗製作（左）となえずでの茶会（右）

4) 移動式茶室を使用した事業

10月に移動式茶室が完成してこれまで下記のイベントに参加させていただいた。

- ①つるおか工業博覧会（鶴岡市 / マリカホール）
- ②鶴工90周年記念学校祭（鶴岡工業高校）
- ③鶴工ものづくり展示会（鶴工 / 三川ジャスコ）
- ④地域福祉センター「なえず」での茶会（市内）

①～③については期間中に200～300人の来客を得て大盛況であった。生徒にとっては「自分が頑張って製作したものを認めてもらっている」感覚が強く、その後の取り組みにも大変熱が入った。

④のイベントについては、市内の社会福祉協議会が運営するデーサービス施設からの依頼により実現した。所内で利用者が点茶を行っていたが、共同開催の依頼であった。鶴工OBの利用者もいて「おおっ！後輩！」と声をかけていただいた。我々の意図していないスタイルでの社会貢献ができたと感じた。

3 おわりに

地元の歴史や伝統文化・技術の調査を通して、ものづくりの過程により深い意味を見出しながら作業に取り組むことができた。多くの人との関わりの中でのものづくりの喜びと楽しみを実感でき、地元の方々との関わりを通して、人との接し方や学ぶことの楽しみを知ることが出来た。

最後に、このたびの製作にかかる費用の全額を「公益信託荘内銀行ふるさと創造基金」によりまかなうことができたことを深く感謝申し上げます。